



平川市議会議員

葛西はやと

みんなが笑って暮らせる社会にしたい！



市政報告はこちらを
ご参照下さい ▶

Report (地方活性化アイドル達の挑戦)

1 講演概要

- 日時
2025年10月8日(水)
14:00~16:00
- 場所
フォルトーナ
- 講演内容
「この街で夢をかなえる
~地方活性化アイドル達の挑戦~」
- 講師
株式会社樋川自動車 代表取締役
有限会社リンゴミュージック 代表取締役
樋川 新一 様
- 主催者
青森県市議会議長会
(令和7年度青森県市議会議員研修会)

2 目的

リンゴミュージックを立ち上げた背景、ビジネスにおける苦勞、人材育成の実践、成功に至る考え方や手法などを伺い、今後の地方創生施策を検討する際の参考とするもの。

3 内容(要約)

(0) はじめに

本講演では、樋川氏が2000年にリンゴミュージックを立ち上げた経緯や、地域密着型の芸能活動を通じた地方創生の実践について講話があった。樋川氏は、本業が自動車販売業でありながら、「主役は子どもたち」との考えのもと、地域の若者が夢を持ち、成長し、その力が地域活性化につながる仕組みづくりに長年取り組んできた。単なる芸能活動ではなく、エンターテインメントを通じた地域ブランディング、人材育成、さらには農業や地域産業との連携にまで活動を広げており、地方から全国、さらには世界へ発信する挑戦の軌跡が語られた。

(1) 講演の概要

①リンゴミュージック設立の背景

リンゴミュージックを立ち上げたきっかけは、弘前市・土手町の賑わいを取り戻したいという樋川氏の強い思いであった。2000年当時、地域の商店街の活気が失われつつある状況を目の当たりにし、「この街を元気にしたい」との思いから活動を開始した。当初は、芸能界の経験ゼロ、資金ゼロ、人材(タレント)ゼロという、まさにゼロからの出発であったが、強い理念と一枚の指針をもとに挑戦を始めたとのことであった。

②活動理念と地域活性化の考え方

樋川氏は、「主役は子どもたち」であり、自らは芸能の専門家ではないとしたうえで、地域の若者たちの力を活かしながら40市町村を応援していきたいと述べた。特徴的なのは、地域を応援する際に、まず曲を制作し、その後で各市町村へ出向くという手法である。また、「熱くて誇り高さ1%の魂」という表現について、これは青森県の人口が日本全体の約1%であることを意味しており、小さくとも誇り高く、強い思いで地域を盛り上げていく決意が込められているとの説明があった。リンゴミュージック設立の目的は、エンターテインメントを通じた地域ブランディングであり、現在は25名のタレントが所属している。

③地域資源を活かしたコンセプトづくり

リンゴミュージックのコンセプトは、

「Cool & Country (カッコよさと田舎臭さ)」

である。

このコンセプトに至った背景として、全国の人に青森県の印象を尋ねると、多くの人が「リンゴ」と答えることから、青森の強みを前面に出すべきと考えたという。そこで、

- ・リンゴに特化する
- ・芸名をリンゴの品種名に特化する
- ・方言をユーモアとして活かす

という戦略を取った。

特に、タレントの王林さんについては、さまざまな役柄のオファーがある中でも、津軽弁に強くこだわり、津軽弁を使えない仕事は断る姿勢を貫いていることが紹介された。これは、地域性を武器として唯一無二の存在感を確立する戦略でもある。

④地域文化を活かした楽曲制作

2000年には、津軽弁、ねぶた、土手町を融合した楽曲「LOVE & SOLDIER」を制作した。これにより、地域文化をエンターテインメントとして再編集し、地域の魅力を発信するスタイルを確立していった。同時に、この楽曲で紅白歌合戦に出場するという大きな目標も掲げたが、メンバーの離脱や未熟さなど多くの困難に直面し、結果的に目標達成には至らなかった。

人材育成に大きな苦勞があったと率直に語られた。



平川市議会議員

葛西はやと

みんなが笑って暮らせる社会にしたい！



市政報告はこちらを
ご参照下さい ▶

Report (地方活性化アイドル達の挑戦)

⑤プレイヤーは商品=人という考え方

エンターテインメントの世界では、プレイヤーそのものが商品であることから、樋川氏は「人を育てること」こそが最も重要であると認識し、試行錯誤を重ねた。

目指したのは、芸能界だけでなく、将来社会に出ても通用する人材を育てることである。

【人材育成で実践してきたこと】

▶ビジネスマナーなどの社会教育の実践

挨拶、礼儀、マナーなど、社会人として必要な基礎を徹底するとともに、先輩が後輩を指導する仕組みを整えた。

▶「言霊」を意識した指導

ネット社会だからこそ、言葉が人をつくり、印象を決めるとの考えから、ポジティブな言葉を使うことを重視した。

▶手書きのお礼状と「ありがとう」の徹底

アナログであっても、感謝の気持ちを具体的に伝えることが大切であるとして、手書きのお礼状を続けてきた。

▶目標設定シートの活用

「目標は必ずかなう」という信念のもと、スクール生に継続して目標を書かせ、自らの夢を可視化させてきた。

▶ランチェスター戦略の実践

弱者が強者に勝つビジネス戦略として、小規模な地方事務所ならではの戦い方を実践してきた。具体的には、

- ・一人当たりの力を高めるため、じっくり時間をかけて考え方を教える
- ・「誰かの役に立つこと」を重視する
- ・損得よりも「先義後利」の精神を大切に
- ・特定地域で高いシェアを得る

といった点が挙げられた。

⑥王林さんの成功と地域愛

王林さんに対して樋川氏は、「青森県の認知度100%を目指すのではなく、愛され度100%を目指せ」と助言したという。

王林さん自身も、当初はモデル志向であったが、活動を通じて青森愛を深め、「青森をアピールできなければ辞める」とまで考え方が変化した。地域の文化や伝統芸能を学び、大学進学も果たしながら、結果として2022年には露出度で全国1位となる活躍を見せた。

なお、王林さんを売り出すために多額の資金を投入したわけではなく、基本的には地道な育成の

成果であるとの話があった。ただし、「踊る！さんま御殿!!」のオーディションについては、樋川氏が関わったことが紹介された。

⑦事業経営の苦労

リンゴミュージックの経営は順風満帆ではなく、2015年頃にはタレントの卒業等も重なり、累積赤字と借入金の問題で経営が非常に厳しい局面に立たされたという。地方で芸能事業を継続する難しさや、それでも理念を曲げずに続けてきた現実が語られた。

⑧農業との出会いと「リンゴの木」

樋川氏は、「リンゴの木が一人前になるには20年かかる」との話を農家から聞き、大きな感銘を受けたという。タレントたちが農家の仕事を手伝いながら、その話に触れることで、物事を育てるには長い時間と根気が必要であることを学んだ。これを受け、2020年のリンゴミュージック20周年には、初の全国ツアーを計画し、多田慎也氏が手がけた楽曲「リンゴの木」を軸に展開する構想を描いた。

この曲の背景には、「桃李不言 下自成蹊」という言葉があり、「本当に良いもののもとには、自然と人が集まってくる」という意味が込められているとのことであった。

⑨コロナ禍での危機と挑戦

しかしながら、2020年のコロナ禍によりライブ活動は停止し、会社は倒産の危機に直面した。そのなかで樋川氏は、「リンゴを売って収入を補えないか」と考え、タレントたちとともにリンゴ農家の仕事に関わるようになった。当初はタレントから不満の声もあったが、結果的には貴重な経験となり、その過程をYouTubeチャンネル『RINGOMUSUMEの産地直送 日本最高!!』で発信していった。

リンゴ栽培を通じて学んだこととして、

- ・実の管理も大事だが、剪定が重要であること
- ・枝の長さによってリンゴの味が変わること
- ・結果には必ず理由があり、考え方と行動が成果に結びつくこと

などが紹介された。

これは人材育成や組織づくりにも通じる考え方として語られた。

⑩コロナ禍がもたらした再確認性

多忙のあまり、タレントと十分に対話する時間が減っていたことについて、樋川氏は「それは危険であり、心を失うことにつながる」と振り返った。



平川市議会議員

葛西はやと

みんなが笑って暮らせる社会にしたい！



市政報告はこちらを
ご参照下さい ▶

■ Report (地方活性化アイドル達の挑戦)

一方で、コロナ禍によって時間ができたことで、改めてタレントたちと向き合い、語り合う時間が持てたことは大きな意義があったと述べた。

⑪ 自社農園設立と新たな挑戦

りんご娘にもリンゴづくりを実践してほしいとの思いから、樋川氏自身が農業者資格を取得し、自社農園「りんご娘スマイルファーム」を設立してリンゴ栽培を始めた。

また、アルプスおとめを次期りんご娘へと成長させるにあたり、将来を見据えた世代交代に踏み切った。

⑫ 今後の目標

今後の具体的な目標として、大谷翔平選手も実践したことで知られる「マンダラシート」による目標設定を用い、2026年5月16日にはるか夢球場で1万人ライブを実施するという大きな目標を掲げている。

その実現のために、青森県内全市町村を回って地域のお役立ちを行い、課題を抽出し、さらに地域活性化につなげていく構想が示された。

また、青森りんご植栽150周年記念ソング「希望の木」についても紹介があり、エンターテイメントを通じた地域への継続的な貢献を目指していることがうかがえた。

4 所感・考察

本講演を通じて、地方創生において重要なのは、単なるイベントや一時的な施策ではなく、**地域への強い愛情、継続する覚悟、人を育てる視点、そして地域資源を磨き上げる発想**であることを改めて認識した。

樋川氏の取組は、芸能活動を手段としながらも、本質的には地域ブランディング、人材育成、産業支援、地域文化の継承に資するものである。特に、青森県の「リンゴ」「方言」「農業」といった**地域固有の資源を逆に強みに転換し、全国へ発信している**点は非常に示唆に富む。また、人材育成の面では、ビジネスマナー、感謝、言葉遣い、目標設定といった**基本を徹底**しており、芸能分野に限らず、地域の若者育成全般に応用できる考え方であると感じた。

さらに、弱者の立場を前提としたランチェスター戦略や、先義後利の精神は、地方の中小事業者や地域団体が活動を継続していくうえでも参考になる。一方で、理念だけでは事業継続が難しく、経営面では大きな苦勞を伴うことも率直に示された。

地方創生において民間の挑戦を活かすためには、こうした先駆的な取組を支える仕組みや、官民連携のあり方を検討する必要があると感じた。

総じて、本講演は、地方から全国へ挑戦するための考え方と実践、そしてそれを支える人づくりの重要性を学ぶ大変有意義な内容であり、今後の地方創生施策を考えるうえで大いに参考となるものであった。

以上





平川市議会議員

葛西はやと

みんなが笑って暮らせる社会にしたい！

市政報告はこちらを
ご参照下さい ▶



■ Report (地方活性化アイドル達の挑戦)

平川市における地方創生に関する提言書

1 提言の趣旨

本提言は、エンターテインメントを活用した地域活性化及び人材育成の実践事例を踏まえ、平川市における持続可能な地方創生の推進に資する施策の方向性を示すものである。

2 現状と課題認識

平川市においても、人口減少や若者流出、地域活力の低下が課題となっている。これまでの施策はインフラ整備やイベント中心となる傾向があるが、継続的な人材育成や地域ブランドの確立という観点では、さらなる工夫が求められる。

3 提言内容

(1) 地域資源を活かしたブランド戦略の強化

リンゴや農産物、自然環境、文化など、平川市固有の資源を「発信力のあるコンテンツ」として再構築する必要がある。特に、若者や外部人材の視点を取り入れた「見せ方（ブランディング）」を強化し、市の魅力を県内外へ発信する体制を整えるべきである。

(2) 若者主体のプロジェクト創出

地域活性化の主役を若者と位置づけ、地域PR活動、イベント企画、SNS・動画発信などに主体的に関われる仕組みを構築することが重要である。単なる参加ではなく、「役割と責任」を持たせることが人材育成につながる。

(3) 人材育成プログラムの導入

学校・地域・行政が連携し、以下の要素を含む実践型人材育成を導入すべきである。

- ①礼儀・コミュニケーション能力
- ②地域理解・郷土愛の醸成
- ③目標設定と振り返りの習慣化

これにより、将来的に地域に貢献できる人材の育成が期待される。

(4) 「弱者の戦略」に基づく集中投資

限られた資源の中で成果を上げるためには、分散型ではなく、特定分野、特定地域、特定ターゲットに絞った戦略的な投資が必要である。小規模自治体だからこそ可能な「集中と差別化」を意識すべきである。

(5) 官民連携の強化

民間の創意工夫や挑戦を活かすため、行政は実証の場の提供、情報発信支援、連携コーディネーターなどの役割を担い、民間主体の取組を後押しする体制を整備することが重要である。

4 今後の方向性

地方創生は短期的な成果ではなく、長期的な人材育成と地域ブランドの蓄積によって実現されるものである。

平川市においても、「人を育てる」「地域を誇る」「発信し続ける」という視点を軸に、継続的かつ戦略的な取組を進める必要がある。

5 まとめ

本提言は、地域資源の再評価と人材育成を基盤とした地方創生の推進を求めるものである。行政・民間・地域住民が一体となり、持続可能な地域づくりに取り組むことを強く提言する。

以上